京都大学総合博物館2019年度企画展
タイムライン——時間に触れるためのいくつかの方法
TIMELINE: Multiple measures to *touch* time
2019年4月24日——6月23日
京都大学総合博物館

主催：京都大学総合博物館　**共催**：京都大学人間・環境学研究科、東海大学 創造科学技術研究機構
後援：京都府教育委員会京都市教育委員会　**企画**：タイムライン展実行委員会
協力：イダショウイチスタジオ　KAYOKOYUKI　豊田市美術館　株式会社ニコンインステック　東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）　株式会社 堀場テクノサービス　森絵画保存修復工房
助成：公益財団法人 花王芸術・科学財団　公益財団法人朝日新聞文化財団

「タイムライン」展　記録と記述の方法

作品をいかに形にし、残し、語るのか。
この問いから立ち上がった本展では、各作家の作品について、物理的な組成や構造、あるいはその成立過程を、作品と共に公開する手法をとっています。

井田照一の《Tantra》（イダショウイチスタジオ所蔵、本展覧会で初公開）と共に展示されているのは、保存修復の調査方法として一般的な光学写真です。ミクロな構造を映し出す顕微鏡写真、蛍光と吸光の差で硝酸の液体染みなどが浮かび上がる紫外線写真、作品の起伏を強調する斜光線写真、絵具に含まれる元素を特定する蛍光エックス線分析のマッピング。これらの分析画像のイメージと合わせて、文字情報として書き起こされた使用素材の数々が、複合的に作品の組成を物語ります。

加藤巧の作品においても、井田作品と同様に、斜光線、紫外線、蛍光エックス線分析が採用されていますが、ここにおいて光学調査は、作品を作家自ら記述するための方法として用いられており、「絵画と等価」もしくは「作品の一部」として扱われています。キセノンランプを使い段階的に退色させた水彩作品では、加藤の選択した絵具が時間の変化にどのように反応したのか、その様相が公開されています。

二種類の石が採用されている大野綾子の作品では、サンプルを採取し、偏光顕微鏡による分析を行いました。二枚の偏光板（ニコル）が取り付けられている偏光顕微鏡では、無色のサングラスをかけたように見えるオープンニコル（偏光子のみを差し込んだ状態）と、鉱物に干渉色がついて見えるクロスニコル（偏光子と検光子を差し込んだ状態）の視野を比べることで、作品に用いられている鉱物の多様な内部構造とその特性を示しています。

土方大の作品では、展示期間中に素材が変容し、色や形がさまざまにうつりかわっていく様子を確かめることができます。本展では、尿素や人造石を用いたインスタレーションが展開されており、土方は、作品の成立過程を実験段階から記録してきました。定点カメラなどを用いた状態変化の記録は、作品の「生」の過程を、作品とともに展示空間で鑑賞可能なものとするために用いられることになります。

ミルク倉庫＋ココナッツは、2つの「事物」と1枚の「ダイアグラム（図）」を、複数並置しています。握り寿司×化石、遅延記憶装置×ショウジョウバエなどのモノの組み合わせと合わせて示されているダイアグラムは、作品が生まれる以前から彼らが「時間とは何か」を主題に行ってきた議論（ブレイン・ストーミング）から生まれているものです。本展では、彼らの議論の一部に立ち会い、インタビューを採取することで、作品の成立過程を追ってきました。また、短命の生体であるハエは、会期中にも世代の交代を繰り返していきますが、こうした作品に訪れる変化や、メンテナンスの在り方についても、記録と公開を試みます。

※　土方大の作品制作の過程、また、ミルク倉庫＋ココナッツのインタビュー内容については、展示会場及びweb上で順次公開を行います。

「タイムライン」展について

私たちは、「時間」とさまざまな形で関わりながら、生活をしています。私たちが生まれ、成長し、老いて、やがて死んでいくことを考えれば、流れている時間と無関係でいられるひとはいないでしょう。

芸術作品の誕生と喪失は、しばしば生き物の命のありようと重ねて語られてきました。作品は「生まれ」、時に「成長」「成熟」し、やがて「老い」て「死ぬ」のだ、と言うように。しかし、私たちは、ふと立ち止まり、考えはしないでしょうか。はたして、芸術作品の生は、人間の命と同じような軌道を描いているものだと言い切れるのか、と。

近現代になって美術の世界に訪れた素材と技法の多様化は、芸術作品の生をありとあらゆる形に変容させてきました。プラスチック、ポリエステル、瓶や缶、ヴィデオやテレビ、みるみるうちに溶けたり消えたりしてしまう短命（エフエメラル）な素材たち、あるいは時を超えて再び現れ新たに見出された伝統的な絵画の材料。複合的な作品の成り立ちを指す語としてよく私たちが耳にする「ミクストメディア」や「インターメディア」は、今やすっかり広く世に知られるようになりました。しかし、実際にそこでどんな「モノたち」が混交（ミクスト）され、作品が何と何の間（インター）をゆらゆらと移ろっているのか、結果として作品の命のありようが—— あるいはその「寿命」が—— どのように複雑化したのか、その答えは、まだ宙を漂っているのです。

現代に生きる私たちが、「モノ」としての—— つまり、物理的な姿形を持ち、この世の中にあって、時間の経過とともに何らかの変質が内外に生じる、変わりゆく存在としての—— 芸術作品がたどる生の過程を、浮き彫りにすることはできないものか？ そこには何が見えてくるのか？「モノ」と私たちの生死の軌道は、いかに異なり、いかに交わり、あるいは遠ざかるのか？ このような問いから、「タイムライン 時間に触れるためのいくつかの方法」展は生まれました。

本展覧会は、芸術作品を作ること、示すこと、残すことに直接かかわり、その全てに考えをめぐらす者たち—— 制作者（アーティスト）・展示者（インストーラー）・修復士（コンサバター）・美術史家（アート・ヒストリアン）が、私たちと芸術作品の時間と生について、共に考える場となっています。作品を生み、それを公の場において、保存し、研究する彼らは、それぞれに異なった職能を持ちながら、それぞれの立場から芸術に真っ向から立ち向かい、作品というモノに「触れている」という点で、軌を一にしています。いかに形にするのか、いかに残すのか、何が残るのか、何を消滅させるのか。試行錯誤を繰り返しながら、彼らの思考は、時の流れの中でモノとモノ以外の間を絶え間なく行き来しては、新たな方向へと導かれていきます。

2006年にこの世を去るまで、生涯を通じて版画の概念を押し広げるかのような作品群を残した井田照一は、病魔に冒された自らの皮膚や体液を作品に埋め込んで、経年変化の果てに腐敗する素材と、死に向かう自らの肉体を切り結ぶ制作を行っていました。芸術家自身のライフログ＝生命の記録ともいえる《タントラ》は、展覧会の起点となる、重要な存在です。

石という硬く抵抗の強い素材に対して、「彫り」「刻む」という働きかけを行いながら、その力強さをあえてかき消すように軽妙な形や場を作り出すのは、大野綾子です。道端に置かれた石や川べりに転がる岩が、ただそこにあり続け密やかに変質し続けていくのに対し、大野の手で名前と形を与えられ「作品」となったそれは、どのように私たちに示され、未来に残っていくのでしょうか。

加藤巧は、古代から連綿と続けられてきた「絵画の物質性」—— さまざまな素材から成りたつ複合的なモノとしての絵画 —— について、「描き」の行為を通して考え続けている作家です。地に痕跡を残す、という、古くから繰り返し行われてきた原始的な行為を、細密な筆による「描き」の手段を用いて再び構築することで、加藤は、絵画を取り巻くモノと人間の行為について捉え直そうとしています。

気温や湿度、光などの外的要因によって姿形が変化するインスタレーションを発表し、また、インストーラーとして芸術祭や展覧会に携わる土方大の活動は、常に、可変的で流動的なモノと共にあります。設営と解体を通して、展覧会場という、ある種、時間的にも空間的にも限定された場をコントロールする土方の振る舞いは、自身の作品を制作する行為と作品に内在する時間と絡みあっていきます。そこには時間の複数性が、確かに立ち上がっているのです。

ミルク倉庫＋ココナッツは、7人の異なった職能（電気設備、造園などの土木系技術や、建築、デザインなど）を複合体として含みこんだアーティストユニットです。議論を繰り返し中世のギルドのように情報交換しながらインスタレーションを制作するミルク倉庫＋ココナッツ。異なった立場からの思考が造形という営為を通してひとつの作品という形をとり立ち現れるとき、彼らの思考や、生み出されたモノたちは、どのように切り結ばれるのでしょうか。

彼らがつくった、修復した、保存した、分析した、考え続けた作品の生の在り方を博物館の空間によりわかりやすく目に見えるように展示するために、展覧会では、作品の科学分析結果や作者の声（オーラルアーカイヴ）の聴取を作品と並べて展示します。これは、目の前の作品が一体何でできているのか、これがどのように生きて、どのように私たちの生きる時間にたどり着き、どこへ向かうのか、生の来し方行く末に、科学の聴診器をあてて、耳を澄ます試みです。「モノ」としての芸術作品が、私たちが生きる時間の中でどのように変質し続けているのか、その全容を記録し記述するための方法を検討してきた2016年からの展覧会（タイムライン）成立過程のすべてもまた、会場で公開され、作品の生と響きあうことになります。芸術作品の生の軌道に対峙し、解剖し、解体し、つなぎ合わせる空間の狭間で、私たちはどのように「時間」と出会い直すことができるでしょうか。

「時間」が私たちにとって平等であるように、モノに携わること、作ること、展示すること、鑑賞すること、残すこと、それらについて考えること、その全ての機会は、あらゆる人々に対し、ひとしく開かれています。

芸術作品と私たちの内外を絶え間なく流れる時間を考えなおす時間、それはひるがえって、私たちの生を今一度問い直すための今日この日この瞬間を紡ぐ営為にも、つながっていくでしょう。

タイムライン展実行委員会：
岡田温司　実行委員長／京都大学人間・環境学研究科教授
岩崎奈緒子　京都大学総合博物館教授
武田宙也　京都大学人間・環境学研究科准教授
加藤巧
田口かおり　東海大学創造技術開発機構講師
土方大

コーディネーター：
清水泰介

デザイン／ Web：
熊谷篤史

設営協力：
石井琢郎　大野高輝　吉良穂乃果　耕三寺功三　須賀亮平　長門あゆみ　村上美樹　山本晋也　米村優人

http://www.artandarchive.com/timeline/

作品リスト

井田照一

1　《Tantra》未公開作品
イダショウイチスタジオ所蔵

1-1　無題
1994｜322×212 mm｜紙、油彩、小石｜イダショウイチスタジオ所蔵

1-2　なぜ落ちる 落下する穴 井戸に落ちる
1998｜322×212 mm｜紙、炭、木 灰、人 灰、顔 料、金、亀 骨 (human ash + wood ash)｜イダショウイチスタジオ所蔵

1-3　雪の性 雪の井戸
制作年不詳｜322×212 mm｜紙、水彩、油彩（プラチナ パール）｜イダショウイチスタジオ所蔵

1-4　雨／雨ノ浸透シタ紙 (rain drops on paper)
1999｜322×212 mm｜水彩｜イダショウイチスタジオ所蔵

1-5　無題
1999｜322×212 mm｜紙、ポジョレー赤、墨｜イダショウイチスタジオ所蔵

1-6　石の影 浸透ト重力 風景 右
1999｜322×212 mm｜紙、油彩｜イダショウイチスタジオ所蔵

1-7　石の影 浸透ト重力 風景 左
1999｜322×212 mm｜紙、油彩｜イダショウイチスタジオ所蔵

2　《Tantra》
1962-2006｜322×212 mm（401点組）｜豊田市美術館所蔵

2-1　No. 37
1973–76｜322×212 mm｜水ノ中ノ物体 石・亀・ヘビ　脱皮ノ時 ソシテ其ノ影 一九七三年冬期 雨ノ日落下した犬／紙、水彩、油彩、ヘビの抜け殻、動物の骨、砂、土｜豊田市美術館所蔵

2-2　No. 39
1974｜322×212 mm｜冠省　最近増々無常感つのり、気をとりもどしたくも無し 亀 魚飛鳥路石／紙、水彩、油彩｜豊田市美術館所蔵

2-3　No. 66
1979｜322×212 mm｜冠省　夢　いつか・どこか　一期一会　年三十八丈カルマ　糸又ハ人生　Ravi en Rose ／紙、水彩、油彩、紐｜豊田市美術館所蔵

2-4　No. 115
1984｜322×212 mm｜Fresh widow Karma Italiana / Under Wear in FRANCE O ITALIAN Window from → Lonely Woman in Paris Fresh Window or Fresh Widow 窓を開く、閉ジル／紙、インク、水彩、端切れ｜豊田市美術館所蔵

2-5　No. 210
1997｜322×212 mm｜紙、金泥、石、小枝、骨、砂、木片｜豊田市美術館所蔵

2-6　No. 203
1997｜322×212 mm｜伽羅／庭 Garden of Eaglwoods／紙、木灰、伽羅木、尿、体液、土、金泥、木屑、火、ヤモリ、伽（?）痘剤｜豊田市美術館所蔵

2-7　No. 202
1997｜322×212 mm｜カルマの庭 玄・葬／紙、木灰、木屑、羽、土、尿、果汁（ブルーベリー）、火、鳥ノフン、体液、ビール｜豊田市美術館所蔵

2-8　No. 215
1997｜322×212 mm｜まほろば求めてまほろば無シ 気流　風景死 ／制鹿（癌?）剤・人灰・口紅・尿・青汁・プラチナ・松黒土｜豊田市美術館所蔵

2-9　No. 312
2000｜322×212 mm｜紙、水彩、油彩｜豊田市美術館所蔵

2-10　No. 343
2002｜322×212 mm｜板、水彩、油彩、紙、銀箔｜豊田市美術館所蔵

2-11　No. 346
2002｜322×212 mm｜紙、油彩、蝋燭｜豊田市美術館所蔵

2-12　No. 360
2003｜322×212 mm｜時間（time）／紙、水彩、小枝、人毛｜豊田市美術館所蔵

2-13　No. 370
2004｜322×212 mm｜紙、水彩、小石｜豊田市美術館所蔵

2-14　No. 385
2005｜322×212 mm｜紙、水彩、硝酸、銀箔、錠剤｜豊田市美術館所蔵

A　イダショウイチスタジオ訪問時記録映像

B–H　イダショウイチスタジオ所蔵未公開作品分析画像

B　顕微鏡写真

C　顕微鏡写真、元素マッピング

D　顕微鏡写真、元素マッピング

E　顕微鏡写真、斜光線写真

F　顕微鏡写真、紫外線写真

G　顕微鏡写真、紫外線写真

H　顕微鏡写真、紫外線写真

I　作品素材
口紅、鏡、砂 コロラド、アラバマ、テキサス、フロリダ、サウスカロライナ

J　作品素材
すっぽん頭蓋骨、すっぽん甲羅 白骨、すっぽん甲羅 ブロンズ、文字箱、文字 切れ端、羽根、羽根のおさめられていた袋

K　作品素材
石 鐵 貝

L　作品素材
タントラ紙

大野綾子

3　ねがう人、立てる人
2017｜1300×3600×600 mm｜砂岩

4　植物と花（草）
2012｜1300×1800×600 mm｜砂岩

5　水中のとき陸と私たち
2019｜1800×2300×350 mm｜鉄、木、紙、ポスターカラー、アクリル等

6　さかなとして暮らす
2017｜180×1600×1400 mm｜御影石

M　大野綾子作品に関する分析画像、岩石サンプル
細粒石英砂岩

N　大野綾子作品に関する分析画像、岩石サンプル
白雲母普通角閃石黒雲母花崗岩（御影石）

加藤巧

7　To Paint #02
2018｜440×364 mm｜木材、亜麻布、石膏地、顔料、アルデヒド樹脂（81）

8　「To Paint #02」を記述する
2019｜440×364 mm｜Photoshop加工した斜光写真、インクジェットプリント、グロスラミネート

9　To Rub #04
2018｜440×364 mm｜木材、亜麻布、石膏地、顔料、アルデヒド樹脂（81）

10　「To Rub #04」を記述する
2019｜440×364 mm｜紫外線写真、インクジェットプリント、グロスラミネート

11　To Paint (heavy metal) #01
2019｜440×364 mm｜木材、亜麻布、石膏地、顔料、アクリル樹脂（Praloid B72）

12　「To Paint (heavy metal) #01」を記述する
2019｜440×364 mm｜元素マッピング・RGB合成画像、インクジェットプリント、マットフレーム、グロスラミネート、カーボン、鉛筆（協力：株式会社堀場テクノサービス 久保田健司）

13　Pic-Cells
2019｜250×500 mm / 256×128 pixel（5枚組）｜元素マッピング・RGB合成画像（上からR：カリウム-G：コバルト-B：鉛、R：鉄-G：クロム-B：鉛、R：鉄-G：水銀-B：カルシウム、R：錫-G：水銀-B：カルシウム、R：カリウム-G：コバルト-B：チタン）、インクジェットプリント、グロスラミネート（協力：株式会社堀場テクノサービス、久保田健司）

2019｜330×180 mm｜Waterford水彩紙、アラビアゴム、顔料（セピア、ビスタ、竜血、雌黄、インディゴ）

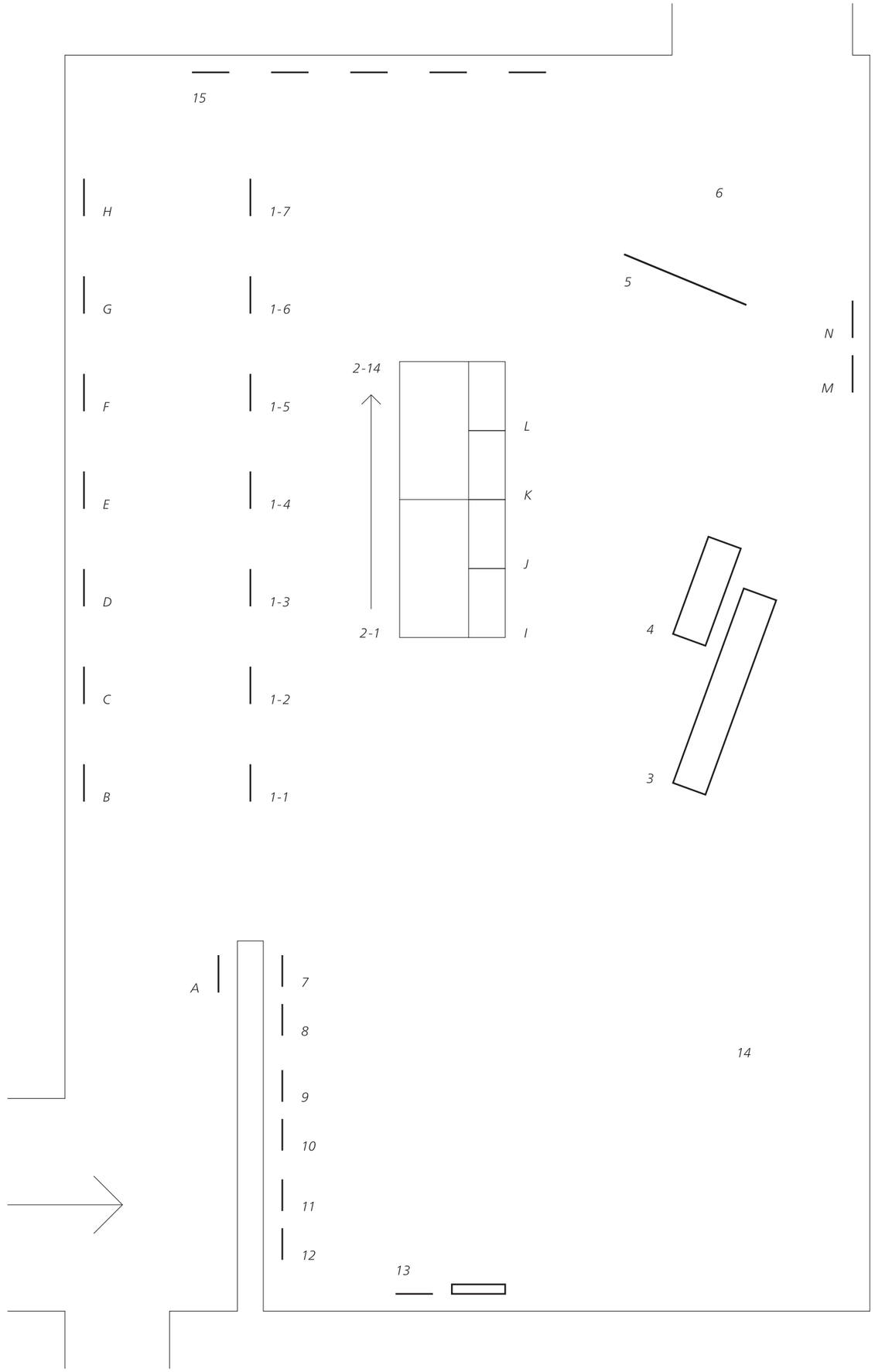
2019｜50×100 mm（5枚組）｜Waterford水彩紙、アラビアゴム、顔料（セピア、ビスタ、竜血、雌黄、インディゴ）、キセノンアーク灯光照射（上から20時間、40時間、60時間、80時間、100時間）

2019｜50×100 mm（5枚組）｜木材、亜麻布、石膏地、顔料、アルデヒド樹脂（81）

2019｜26.8MB｜CDR

土方大

14　Artificial Garden
2019｜100×4000×4000 mm、サイズ可変｜尿素結晶、人造石、ターポリン

ミルク倉庫＋ココナッツ

15　それらはしっかりと結ばれていて、さらに離れたキャビネットに閉じ込められています——それでも、物は動かされ、音楽は演奏されます。
They are bound together securely, then locked in their remoter cabinets — and yet things are moved, music is played and so forth.
2019｜1950×900×600 mm×5、サイズ可変｜台に乗った2つの事物、合成紙にインクジェットプリント、その他、が5セット